

# 令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」


## 事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 埼玉県 】

学校名【 県立草加南高等学校 】

1 実践テーマ	①・②・③・④・⑤（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	学年 1学年 人数 282名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（総合的な探究の時間） ② 行事名（東京2020スペシャル） ③ テーマ（東京2020パラリンピックのレガシーについて考えてみよう！） (2) 地域における活動 ① イベント名（－）② その他（－）
4 目標 (ねらい)	1 国立競技場の施設・設備の様子や建設までの過程を知ることを通して、東京2020パラリンピックのレガシーについて学び、共生社会の実現に向けて人々の意識や態度が変わり始め、共生社会を目指す動きが広まってきていることもレガシーであることを知る。 2 共生社会の実現に欠かせないものの見方や考え方を理解し、未来に継承していくために今後自分にどのようなことができるのかを考える。
5 取組内容	(1) 実施日 令和3年7月20日（火） (2) 教材 『I'm POSSIBLE』（IPC公認教材） (3) 内容 ワークショップ（担任が進行役） <u>・導入</u> 「考える」「意見交換する」「共有する」をルールに活発なワークショップを実施した。また、パラリンピアン映像を見て、その姿や言葉に刺激を受け、パラリンピックについて、学習意欲の向上を図った。 <u>・国立競技場を例にレガシーについて考える</u> 国立競技場や選手村、道路について、レガシーとの結びつきをグループで考え、発表した。また、車いすエリアの工夫についても合わせて意見を出し合った。 <u>・国立競技場の設備の工夫について考える</u> 国立競技場の設備は、ユニバーサルデザインと呼ばれる場で、様々な団体が集まり、考えや意見を出し合って決定されたことを

	<p>知る。また、障がいがある人だけでなく、乳幼児のいる父親や高齢者なども利用しやすいように話し合われたことを理解させた。</p> <p><b>・わたしたちにできることを考える</b>      自分にできることを「日常生活」「将来の職業」「政治参加」「社会貢献」から選択し、考えをワークシートにまとめ、発表する。</p> <p><b>・振り返り</b>      ワークショップを振り返り、感想をワークシートに記入する。共生社会に向けた動きが活発になるためにはどうしたらよいか考える。様々な立場の人たちが話し合うことはたいへんだが、理解し合うことは大事なことだと理解する。</p> 
<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京2020大会のレガシーの一つである国立競技場は、設計の段階から様々な人々の人権に配慮した工夫があったことを理解した。</li> <li>・ワークショップを通して、「より多くの人たちにとって快適な場所」というのは、立場がことなる人たちの声を集めることと異なる意見がある場合は対話を通して進めていくべきであることを理解した。</li> <li>・施設や人々の意識が変われば、不便や困難な状況が軽減されていくことに気づいた。</li> </ul>
<p>7実践において工夫した点(事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義形式では、通り一遍の理解で終わる学習であるが、ワークショップを通して、生徒自身が本音や生の意見を言い合うことによって理解がさらに深まった。</li> <li>・オリンピック・パラリンピック開催を目の前にして、生徒の興味関心が高いところで実施した。</li> <li>・『探究通信』を事前に発行し、生徒が事前学習を進めやすいように配慮した。</li> <li>・なぜパラリンピック教育が必要なのか、それがあつてどんな変化や可能性があるのかをワークショップを通して理解できた。</li> </ul>
<p>8主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍で地域との交流会縮小、または中止になっている中、障がい者との交流が少なくなつてきている。オンラインなどで双方向通信アプリ等を活用し、地域と交流が始まり、地域に貢献できればと考える。</li> <li>・生徒会や吹奏楽部等が地域の特別支援学校との交流を行っている。その体験を題材にすることも検討していきたい。</li> </ul>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・このワークショップは、1年で「本質や世界の諸問題を知る」、2年で「情報を整理、分析する」、3年で「社会の諸問題の解決策を企業から学ぶ」である。総探で体系的に進めていく。</li> </ul>

令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

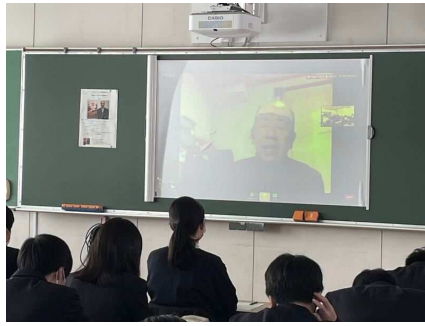
事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 埼玉県 】

学校名【 県立草加南高等学校 】

1 実践テーマ	I ・ II ・ Ⅲ ・ Ⅳ ・ V（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	1学年 278名 2学年 272名 3学年 273名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名（総合的な探究の時間） ② 行事名（パラリンピック講演会）
4 目標 (ねらい)	今年度、オリンピック・パラリンピックが開催され、オリンピックとともにパラリンピックもリアルタイムで放送された。パラリンピックを通して、パラスポーツのすばらしさや障がいを持ちながらスポーツをする困難さなど、様々なことが観客に届いている。長年、障がい者スポーツに携わる方から講演を頂き、障がい者教育・障がい者理解を深める。
5 取組内容	(1) 実施日 令和3年12月21日（火） (2) 講師 映画監督 中村 和彦 氏 (3) 内容 障がい者スポーツへの理解  映画監督 中村 和彦 氏を招いて、サッカー日本代表ドキュメンタリーDVD 及び障がい者スポーツに焦点を当てたドキュメンタリー映画の製作を通して、彼が思うこと、高校生に伝えたいことを拝聴する。  Google Meet を使用して、中村氏とのコミュニケーションの中で、どんなきっかけで障がい者スポーツを映画化しようと思ったのか、作品「蹴る」の内容等を紹介して頂いた。  進行役にサッカー日本代表の名物サポーター「ちょんまげ隊長」こと 角田寛和 様も協力してくださり、障がい者のスポーツについてお話も伺った。



「ちょんまげ隊長」こと  
角田 寛和 氏



本校の教諭



映画監督 中村 和彦 氏

## 6 主な成果

本校の生徒が映画監督と語ることはほとんど初めてで、その経験の豊かさと障がい者スポーツのすばらしさに触れる語り口に圧倒されていた。一方、庶民的な近所のおじさんという印象もあり、親しみやすい雰囲気もあり、障がい者スポーツの実態への理解を深めていた。

インクルーシブな社会の維持に立派に貢献する礎を築く講演会になったと確信している。



<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>コロナ禍の中、クラスごとに Google Meet を効果的に活用して、講演会を開催した。中心となる教室に予め講演者と会話をする生徒を集め、コミュニケーションをしていく様子を他の生徒は視聴する形態をとった。本校にもファシリテーターの教員がおり、生徒たちの様子を感じながら、講演者に質問をしたり、生徒たちに意見を求めたりして、丁寧に調節を行いながら講演会を進めていった。</p>
<p>8主な課題等</p>	<p>講演者と生徒たちが、Google Meet を使用してではなく、実際のフリーな会話でやりとりをしながら、お互いが意見を求めたり、自分が意見を言ったりして、障がい者への理解を深めることが大事だと考える。だが、現在の高校生は、私たち教員よりも SNS でのコミュニケーションが円滑で慣れているように思えた。デジタル・ネイティブ時代の中で、高校生にとって魅力あるコミュニケーションを取らせるには学校側の勉強が不可欠である。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>オリンピック・パラリンピック教育は、障がい者教育、人権教育、LGBT 教育、国際理解教育など多くの分野に枝分かれしている。  スポーツに限定するのではなく、生徒自ら様々な分野に繋げられる考え方ができるようにアクティビティを工夫して実践していく。  東京 2020 オリンピック・パラリンピックを様々な形で語り続ける役目を任されているのは現在の若者なので、しっかり自分の言葉で話せるように育成していくことが私たちの使命であるだろう。</p>

# 令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

## 事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【 埼玉県 】

学校名【 県立草加南高等学校 】

1 実践テーマ	I ・ II ・ Ⅲ ・ Ⅳ ・ V（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	1 学年 普通科 238名 外国語科 40名 2 学年 普通科 235名 外国語科 37名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名・・・総合的な探究の時間：普通科 ・・・英語表現Ⅰ及びⅡ：外国語科 ② 行事名 SDGs イベント 1 学年 普通科 SDGs ワークショップⅠ 外国語科 SDGs プレゼンテーションⅠ 2 学年 普通科 SDGs ワークショップⅠ 外国語科 SDGs プレゼンテーションⅡ
4 目標 (ねらい)	世界規模で取り組むべき課題について学び世界の多様性と文化の理解を深めるとともに、学んだ内容を授業のカリキュラムの一部として英語で発信することにより、「知識・思考・語学力」など世界市民として活躍するために必要な要素の育成を行う。
5 取組内容	(1) 実施日 令和3年10月11日(月) 6～7時限 令和4年2月14日(月) 6～7時限  (2) 講師 一般社団法人 日本あんしん生活協会代表 寺島 義智 氏 他6名  (3) 形態 普通科 SDGs ワークショップ 外国語科 SDGs プレゼンテーション 【ワークショップ】 SDGsの17の目標（ゴール）には何があるのかを確認する。また169のターゲットの2段構造についても知る。 ・カードゲーム 2030SDGs 2～4名1グループに分かれて、与えられた目標に向けてプロジェクトを実行していく。 ・なぜSDGsが必要か？今、世界で実際に起きている出来事を知り、世界のつながりや自分も起点になることを知る。



ワークショップの様子①



ワークショップの様子②



ワークショップの様子③



ワークショップの様子④

### 【プレゼンテーション】

外国語科は、ワークショップを卒業し、グループごとに世界の事情をまとめ、SDGsの解決法をプレゼンテーションした。

外国語棟のシアタールームでプロジェクターを使用しての実施となった。世界の国々の中で、貧困、多大なる鉱物資源、観光、LGBT、海洋資源、地球温暖化、食糧難等の課題を英語でプレゼンテーションした。



プレゼンテーション①



ALTのレビュー①



ALTのレビュー②



プレゼンテーション②





ALT のレビュー③



プレゼンテーション③



外国語科（2 学年）の生徒と ALT（2 名）でのプレゼンレビュー

## 6 主な成果

### 【ワークショップ】

- カードゲーム「2030 SDGs」では、SDGsの17の目標を達成するために、現在から2030年までの道のりを体験することができた。
- 様々な価値観や異なる目標を持つ人々がいる世界で私たちがSDGsの壮大なビジョンを実現していくための基礎知識をポジティブに学ぶことができた。
- SDGsという言葉聞いたことがない、または、あまり興味を示さない生徒でも、ゲームが持つ親しみやすさや面白さで知らず知らず熱中し、楽しみながらSDGsの本質を学ぶことができた。
- 「経済、社会、環境など」のバランスを深く学ぶことができ、生徒自身が将来の目標や仕事について考える足掛かりになり、もっと学びたいという意欲が湧いてきた。

### 【プレゼンテーション】

- 本校外国語科2学年でSDGsをテーマに「麗澤大学プレゼンテーションコンテスト」にエントリーした。2チームが本選まで勝ち上がり、全国60チームの中、2位優秀賞に入賞した。  
生徒たちが、調査、分析、プレゼンの言葉、練習等を何回も行い、継続的に努力したものが、形になると生徒たちの自己肯定感は上昇していく。

<p>7実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>【ワークショップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•SDGsという一見難解な概念を、ゲームを体感しながら学べ、興味関心を喚起しやすいので、本質への理解まで到達がスムーズに行える。また、生徒一人ひとりが、ゲームを通して気づいた点をそのままテーマ設定でき、将来への学習や仕事に繋げることができることを「ねらい」とする。</li> <li>•「なぜSDGsが私たちに必要なのか」「それがあることで、どんな変化や可能性があるのか」を体験的に理解させる。</li> </ul> <p>【プレゼンテーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•オリンピック・パラリンピック教育の一環として、スポーツの範囲を超えて、世界の国々の事情を知ることである。日本が世界の国々の事情を知り、どんな戦略でどう対応していくか、「将来の日本を支える社会人の育成」については、その礎を築けているのではないかと考える。外国語科3学年では、生徒それぞれの進路に対して個々のテーマでプレゼンテーションの精度を上げていく。</li> </ul>
<p>8主な課題等</p>	<p>【ワークショップ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•コロナ禍で、地域との交流が縮小、または、中止になっている中、SDGsについて意見を交換する場が少なくなっている。オンラインなどで双方向通信アプリ等を活用し、より多くの生徒にこの事業の成果を還元できるように検討していく。</li> <li>•講師をお呼びしてのワークショップについては、事業の補助金及び学校の予算と相談しながら、次のステップへ進めていく。</li> </ul> <p>【プレゼンテーション】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•調査や分析、話している英語は、すばらしいものである。スクリーンに打ち出されている表やグラフもわかりやすい。だが、プレゼンは人が人に伝えるのものである。声の大きさ、発表の時のスマイルなど「人に伝える」スキルが不十分であることがALT、教諭、生徒を通して共通理解できた。</li> </ul>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•SDGsワークショップの取組は、1年で「本質や世界の諸問題を知る」、2年で「情報を整理、分析する」、3年で「社会の諸問題の解決策を企業から学ぶ」、卒業後に生徒自身から発信できる力がつくことをねらいとし、体系的に実施していく。</li> <li>•県主催、または、大学等主催のスピーチコンテスト、プレゼンテーションコンテスト等に参加し、公共の場でのアウトプットを経験し、コミュニケーション力を向上させていく。</li> </ul>